

新古今時代古典影響の一断面（承前）

——正治二年初度百首を中心として——

辻 森 秀 英

で、この作品群は初度のものであることが知られる。又、院の御集や拾遺愚草の作品からも知られる。

二

(1) ^(註1)後鳥羽院の作品について

百首の歌に影響を与えている古典作品の数は次の通りである。
(註2以下も同じ。なお、調査の範囲は私家集までに及ばなかった。)

古今集	三首	拾遺集	二首
金葉集	一首	詞花集	二首
千載集	八首	古今六帖	一首
源氏物語	一首	更級日記	一首
(計) 一九首			
(2) ^(註3) 釈阿の作品について			
万葉集	五首	古今集	三首
後撰集	一首	拾遺集	三首
後拾遺集	六首	金葉集	一首

正治二年の後鳥羽院初度百首は、八月に下命された百首歌である。藤原定家にとっては歌人としての運命を決した重大なものであった。彼はこの百首で初めて後鳥羽院に認められ、一廉の歌人としての地位を築いたのである。しかも、彼は源通親によって一旦作者から除かれたのであるが、父俊成が「仮名奏上」を奉って、ようやく許されたのである。それと同時に、家隆も作者に加えられた。それ程権威を持った百首であり、御子左家にとっては記念すべきものであった。故にこの百首は新古今時代の代表的な百首の一つと見られるであろう。統群書類従第十四輯に集められている「正治二年院御百首」はこの「院初度百首」である。この歌群は、多数の作者の、時を同じくする百首歌を知ることができ、比較し易いので、これを一資料として新古今時代の古典影響を調査する。

註 統群書類従には「院御百首」としてゐるが、秋篠月清集の「院初度百首」とする作品がこの作品群に含まれているの

計 一九首
(3) 慈円の作品について

古今集 六首 後撰集 一首

拾遺集 二首 後拾遺集 七首

千載集 一首 計 一七首

(4) 寂蓮の作品について

万葉集 一首 古今集 四首

後撰集 一首 拾遺集 二首

後拾遺集 二首 金葉集 二首

詞花集 二首 千載集 四首 (本歌二首一)

計 一八首 (内本歌二首一)

(5) 前斎院 (式子内親王) の作品について

万葉集 四首 古今集 一八首 (本歌二首一)

後撰集 一首 (拾遺集と重複一首)

拾遺集 一首 (後撰集と重複一)

後拾遺集 二首 金葉集 二首

千載集 一首 伊勢物語 一首

狭衣物語 一首 計 三一首 (本歌二首一、重複一)

(6) 季経の作品

古今集 七首 後撰集 一首

拾遺集 九首 後拾遺集 二首

金葉集 八首 詞花集 二首

千載集 五首 伊勢物語 一首

平家物語 一首 増鏡 一首

計 三七首
(7) 小侍従の作品について

万葉集 一首 古今集 一〇首 (本歌二首一)

後撰集 一首 拾遺集 二首

後拾遺集 一首 金葉集 二首

詞花集 五首 千載集 二首

源氏物語 一首 水鏡 一首

計 二六首 (本歌二首一)

(8) 良経の作品について

万葉集 六首 古今集 一三首

後撰集 二首 拾遺集 二首

後拾遺集 四首 金葉集 一首

詞花集 一首 千載集 一首

伊勢物語 二首 (古今集と重複一)

曾丹集 一首 山家集 一首

計 三四首 (内、重複一)

(9) 定家の作品

万葉集 四首 古今集 一六首

後撰集 一首 計 二二首

(10) 家隆の作品

万葉集 二首 古今集 二五首 (本歌二首二、拾遺

集と重複一)

後撰集 二首 拾遺集 三首 (古今集と重複一)

後拾遺集 一首 金葉集 三首

詞花集 二首（千載集と重複一）

千載集 八首（詞花集と重複一）

新古今集 一首

計 四七首（内本歌二首の歌二首。重複する歌二首）

註(1) 以下の掲載歌は、前の歌が後鳥羽院、後の歌が影響を与えた古典の作品である。

桜花ちりのまがひに日は暮ぬ家路も遠し志賀の山越

この里にたびねしぬべし桜花ちりのまがひに家路忘れて

（古今集・七二）

夜もすがら宿のこずゑに郭公まだしきほどの声を待哉

五月こばなきもふりなむ郭公まだしき程の声をきかばや

（古今集・一三八）

さみだれは猶晴やらで郭公ほのかに名のる明がたの声

夕月夜いるさのやまの木隠れにはのかになる時鳥かな

（千載集・一六三）

以下影響を与えた歌を省略し、院の歌の終りの（二）の中に影響を与えた歌がある歌集名と国歌大観番号を記す。

御蔵する川瀬に風の涼しきはこよひをこめて秋やたつらむ

（千載集・二二四）

あさくらやきのまろどのにすむ月の光はなのる心地こそす

れ

（更級日記・六二六）

まばらなる楓の板屋に音はしてもらぬ時雨や木葉なるらん

（千載集・四〇三）

くまなしや朝夕霧の晴ずともかつらの里の秋の月かげ

（金葉集・二〇二）

秋の月霧のまがきにすみなれてかげなつかしき山べの里

（千載集・三一〇）

橘のこじまがさきの月かげをながめやわたす宇治の橘守

（古今集・九〇四）

山おろしに汀のなみはたかくともなを霧ふかし宇治の河か

ぜ

さは姫のそめし緑やふかゝらんときはの森は猶もみぢせで

（源氏物語・一三九三）

霜がれの離のきくの雪ふればなをはつ花の心地こそすれ

（詞花集・一三三）

さらに又うすき衣にかげさえて夏をやこふるをのゝすみや

（千載集・四四九）

此比のときはの山はかひもなしえだにも葉にも雪しづまり

て

（拾遺集・二五二）

しは風やさむけかるらん冬の夜のふけるのうらに千鳥鳴な

り

（千載集・九八七）

是までも旅のね覚は哀なりしづがをのみもこゝろこゝろに

（千載集・一一六五）

物ごとにさびしきやどの住居哉まがきになるゝ嶺のしら雲

（千載集・一一〇二）

しろきさぎひとりねはねじの声すなりゆるぎの森の暮方の雪

（古今六帖・六）

結びをきし雲雀の床も草枯て願れわたるむさしのの原

註(2)

以下の掲載歌は、前の歌が釈阿、後の歌が影響を与えた古典の作品である。

《詞花集・一三九》

たまはゝき初子の松にとりそへて君をぞいはふ賤のこやまで

初春の初子の今日の玉ははき手にとるからにゆらぐ玉の緒

《万葉集・四四九三》

さわらびは今はをりにも成ぬらんたるひの氷岩そゝぐなり
いはそそぐ垂水の上のさわらびのもえ出づる春になりにけるかも

《万葉集・一三八八》

夕月夜ひかりをそへて卯花の名よりこえたる玉河の里

見渡せば浪のしがらみかけてけりうの花さける玉川の里

《後拾遺集・一七五》

以下影響を与えた歌を省略し、釈阿の歌の終りの《二》の中に、影響を与えた歌がある歌集名と国歌大観番号を記す。

なつかしき声をとどめば子規さ月のたまにむすびそへまし

《万葉集・一四六五》

五月雨は泉のそまの民なれや官木は水のくだすなりけり

《万葉集・二六四五》

涼しやとうきぬの池に袖ぬれてひしとりすさみくらす比哉

《万葉集・一二四九》

あふ坂は関の清水にせかれつつ過ぞやら

《拾遺集・一七〇》

秋のくれとへかし人の山里をかり田の原にうづら鳴なり

《後拾遺集・三〇二》

かみな月しぐれてわたるむら雲に心は空に袖はしほれぬ

《後拾遺集・三八一》

外山なるまさきのかづら色付ば吉野の奥の冬ぞしらるゝ

《古今集・一〇七七》

よを残ささびしき宿は埋火のあたりばかりぞたのみ成ける

《後拾遺集・四〇二》

さしも草さしも忍びぬ中ならば思ひありともいはまし物を

《後拾遺集・六一二》

かくしもは契あればぞ思ふらんだかかさてよをしの毛衣

《金葉集・三一七》

君をのみたちてもゐても思ふ哉かりちの池の鳥ならなくに

《拾遺集・七七九》

枕だに知なる物をかはしをきてなぞしも人のつれなかるら

《古今集・六七六》

かりそめの袖も浪こす須磨の浦にもしほたれけん昔をぞし

《古今集・九六二》

心あらん人のとへかし梅の花霞にかほる春のやまざと

《後拾遺集・四三三》

夏きてぞ住かへりける山里は卯の花かきね子規なく

《後撰集・一四八》

難波人あしをあをばやはさでたくみどりにかすむ夕煙哉

《拾遺集・八八七》

註(3)

以下の掲載歌は、前の歌が慈円、後の歌が影響を与えた古

典の作品である。

庭の雪の消ゆくひまをたどりつゝかきねの草ぞ春もとめける

野べみれば若なつみけりむべし杜垣ねの草も春めきにけり

(拾遺集・一九)

よはにくる鴈の涙や露ならん今朝はうつろふしがの花ぞの秋の夜の露をばつゆとおきながら雁の涙や野べをそむらむ

(古今集・二五八)

千々にこそかたはらずとも郭公しのだの森に一声もがな夜だにあげば尋ねてきかむ郭公信太の杜の方になくなり

(後拾遺集・一八九)

以下影響を与えた歌を省略し慈円の歌の終りの(二)の中に、影響を与えた歌がある歌集名と国歌大観番号を記す。

ともしする火串の陰にくれはとりあやしき鹿の思はざるらん

(千載集・二〇〇)

うつつにはなみのかずを思ひにて夢の枕に鳴のはねがき

(古今集・七六一)

もみぢする秋の朝露たつた山夜半に染けん色なくしそ

(古今集・九九四)

きりふすよもぎの霜に思ひ出よ枕の下露になれにき

(後拾遺集・二七三)

秋はけふ錦をきてやかへる覧暮ゆく雲にもみぢ散なり

(拾遺集・二二〇)

高砂のおのへの紅葉散にけりとやまの風音のさやけさ

(後拾遺集・一二〇)

身にとまる年をさへこそおしみけれ春と秋との暮しならひに

(後拾遺集・八)

いたづらになき名ばかりは竜田河わたらぬ袖を幾夜ぬらし

(古今集・六二九)

昔こそ月やあらぬとながむなれ春さへくれぬわがもとの身に

(古今集・七四七)

都出ていくよあかしの浦ならんくもらぬ月も日かず成けり

(古今集・四〇八)

思ひいづる都の友のなきぞうき月をまつかせ独ながめて

(後拾遺集・一一三九)

いつかわれみ山の里の淋しきにあるじとなりて人にとはれん

(後撰集・四六九)

千とせまでつもれる年のしるしとて雪をかさぬる鶴の毛衣

(後拾遺集・四三八)

神風やみもすそ河による波のかず限なき君が御代かな

(後拾遺集・四五〇)

註(4)

挙げた歌は古典に影響を受けた寂蓮の作品で、(二)の国歌集名と番号は、影響を与えた古典作品の国歌大観番号と属している歌集である。

あはち島かよふしるべに立けぶり霞にまがふ須磨の明ぼの

(金葉集・二八八)

春風に池の水はとゞまらでうきねの鴨ぞ猶のこりける

(詞花集・一四)

青柳のなびく木末の色のみぞ風にまかせて見るべかりける

《拾遺集・三三三》

たづねつる木の下風に雪散りて花ゆへ春もわすられにけり

《拾遺集・六四〇》

やへしげるむぐらの門はをのづから庭まで散らぬ花も有けり

《後拾遺集・一七〇〇》

今はとて山ほとゝぎす松がえに春もかゝれる池の藤なみ

《古今集・一三三五》

はれまなき五月の雲も卯花のかきねにはる玉川の里

《後拾遺集・一七五〇》

御蔵する川瀬にさ夜や更けぬらむかへる袂に秋風ぞ吹く

《千載集・二二四〇》

七夕の物思ふ袖や銀河紅葉の橋をしぐれ初けん

《詞花集・二一八〇》

みやぎのの萩の朝露うちらはひ花に乱るゝしのぶもちずり

《古今集・七二四〇》

うつしうへし小萩が本の秋の野に成はてねとは思はざりし

《源氏物語・七六二二》

名ごりなく明石の浦に雲消て月にぞやどる沖つ白浪

《金葉集・二一〇〇》

ものごとに秋のあはれものこるなり霧のまがきにすめるよの月

《千載集・二二三二、三二〇〇》

さびしさは思ひやるだにある物を正木のかづら敷ふるなり

《古今集・一〇七七》

さよ千鳥明石のせとの浦風に鳥がくれゆく声きこゆなり

《古今集・四〇九〇》

ひきかけし神の誓ひを頼むかな身こそうきたの森のしめな

《万葉集・二八三九〇》

水鳥の玉もの床のうきねかは浪よせかけぬ時のまぞなき

《千載集・四三二二》

今はたゞ雲の八重たつおくにてもあたりをとはん山人もが

《後撰集・一一七四〇》

註(5) 挙げた歌は古典の影響を受けた前斎院の作品で、(一)の

中の歌集名と番号は、影響を与えた古典作品の国歌大観番号

と属している歌集である。

嶺の雪もまだふる年の空ながらかたへかすめる春の通路

《古今集・一六八〇》

雪きえてうらめづらしき初草のはつかに野辺も春めきにけり

《古今集・一七一〇》

足引の山の端かすむ明ぼのに谷よりいづる鳥の一声

《古今集・一四一〇》

ながめやる霞の末は白雲のたなびく山のあけぼのの空

《拾遺集・三三三五》

高砂のおのへの桜たづねれば都のにしき幾重かすみぬ

《後拾遺集・一一二〇〇》

かすみゐるたかまの山のしら雲は花かあらぬかかへる旅人

《古今集・二七二二》

夢のうちもうつろふ花に風吹てしづ心なき春のうたゝね

〔古今集・一一七〕

池さむきはすのうき葉に露はぬ野辺に色なる玉や敷らん

〔金葉集・一五四〕

うたゝねの朝けの風にかはるなりならず扇の秋の初かぜ

〔後拾遺集・二三七〕

白露の色どる木々はをそけれど萩の下葉ぞ秋をしりける

〔古今集・二〇九〕

はな薄まだ露ふかくほに出てながめじと思ふ秋のさかりを

〔古今集・二四三、六五三〕

萩のうへに鷹のなみだのをく露はこほりにけりな月に結びて

〔古今集・二二二〕

とけてぬ袖さへ色に出ねとや露吹むすぶ峰の木がらし

〔狭衣物語・一五九二〕

神無月みむろの山の山おろしにくれなぬくる竜田河かな

〔古今集・二九四〕

見るまゝに冬はきにけり鴨のゐる入江の汀うす氷りつゝ

〔千載集・四三五〕

時雨つゝよもの紅葉はふりはてゝあられど落る庭のこのはに

〔金葉集・二七三〕

夜を寒みね覺て聞けばをしぞ鳴く私もあへず霜や置くらん

〔拾遺集・二二八、後撰集・四七九〕

あまつかぜ氷をわたる冬の夜のをとめの袖をみがく月かげ

〔古今集・八七二〕

和田の原ふかくや冬の成ぬらん水ぞつなぐあまの釣舟

〔古今集・四〇七〕

しらせばや姿の池の花がつみかつみるまゝに袖ぞしほるゝ

〔古今集・六七七〕

わきもこが玉もの裾による浪のよるとはなしにはさぬ袖哉

〔万葉集・四〇〕

あふ事はとをつの浜のいはつゝじいはでや朽むそむる心は

〔古今集・四九五〕

我袖はかりにもひめや紅のあさはののらにかゝる夕つゆ

〔万葉集・二七六三〕

あふ事はけふ松が枝の手向草いくよしほるゝ袖とかはしる

〔万葉集・三四〕

まち出てもいかながめんわするなといひし計の有明の空

〔古今集・六九二〕

都人おきつこじまのはまひさし久しく成ぬ浪路隔て

〔伊勢物語・二二二〕

ゆくすゑは今いくよとかいはしろの岡のかやねに枕結はん

〔万葉集・一〇〕

身のうさを思ひくだけばしのゝめの霧まにむせぶ鳴の羽がき

〔金葉集・六二〇、古今集・七六一〕

かめのをの岩ねが上にゐるたづも心してける水の色かな

〔古今集・三五〇〕

君が代はちくまの河のさざれ石の苔むす岩となり尽すまで

〔古今集・三四三〕

註(6) 季経の歌と影響を与えた古典作品の一部を出し他は紙数の

音羽川いはまの氷とけぬればせきいるゝ水に春はみえけり
うちなびき春はきにけり山河の岩間の氷今日や解くらむ

(金葉集・二)

都へと出はてにける鶯のたにの古巢は風やもるらん

驚は木づたふ花の枝にても谷のふるすをおもひわするな

（詞花集・二五八）

さは姫のそむる縁を色に出ていつしかみする雪のした草

佐保姫の糸そめかくる青柳をふきなみだりそ春の山かぜ

(詞花集・二三)

註(7) 小侍従の歌と影響を与えた古典作品の一部を出し他は紙数

の関係で省略する。

三輪の山尋し杉は年ふりて春のしるしの松たてゝけり

我庵は三輪の山もと恋しくばとぶらひきませ杉たてる門

(古今集・九八二)

驚の谷のふるすのとなりにてまだかたことの初音をぞきく

十人の作家の作品に影響を与えた歌を総統計すると次の表になる。(数字はそれぞれの作家に影響を与えた歌数である。)

驚は木づたふ花の枝にても谷のふるすをおもひわするな

(詞花集・二五八)

初春の草のはつかにつむとてやわかなといひて年のへぬらん

春日野の雪まを分けて生出くる草のはつかに見えし君はも

(古今集・四七八)

良經の作品については国文学研究第二十二集、拙稿「新古註(8)

今時代古典影響の一断面」五九頁註(1)参照。

定家の作品については前註(8)と同じ拙稿の六一頁、註(2)

参照

家隆の作品については前註(8)と同じ拙稿の六二頁、註(3)

参照。

三

拾遺集	後撰集	古今集	万葉集	古 歌 集 ／ 作 者
二		三		羽後 院鳥
三	一	三	五	枳 阿
二	一	六		慈 円
二	一	四	一	寂 蓮
一	一	一八	四	前 斎院
九	一	七		季 経
二	一	一〇	一	小侍 從
二	二	一三	六	良 経
	一	一六	四	定 家
三	二	二五	二	家 隆
二六	一一	一〇五	二三	計

計	水鏡	増鏡	平家物語	更級日記	狭衣物語	源氏物語	伊勢物語	山家集	曾丹集	古今六帖	新古今集	千載集	詞花集	金葉集	後拾遺集
一九				一		一				一		八	二	一	
一九														一	六
一七												一			七
(本歌一首) (重歌二首)												四	二	二	二
(本歌一首) (重歌二首)					一		一					一		二	二
三七		一	一				一					五	二	八	二
(本歌一首) (重歌二首)	一					一						二	五	二	一
(本歌一首) (重歌二首)							二	一	一			一	一	一	四
二二															
(本歌一首) (重歌二首)											一	八	二	三	一
二六九	一	一	一	一	一	二	四	一	一	一	一	三〇	一四	二〇	二五

作家十名の作品は一千首でその中、二六九首が影響を受けた歌で

あるから約二割七分にあたる。影響を与えたものは、古今集が一

○五首で約半数を占めて最高である。次は三十首の千載集である。影響を受けた歌の中には、単なる影響を受けているに過ぎない

ものと、本歌取りになっているものがある。それぞれの歌数を表わす表を次に示す。

種 類	作 者										
		後鳥羽院	釈阿	慈円	寂蓮	前斎院	季経	小侍従	良経	定家	家隆
本歌取数	一七	一九	一四	一六	二六	二一	二五	二四	一六	三七	二二四
影響歌	二		三	三	五	一六	一	一〇	五	一〇	五五
計	一九	一九	一七	一九	三一	三七	二六	三四	二一	四七	二六九

これで見ると、影響を受けている歌の殆んどが本歌取りであることが知られる。

四

本歌取りでない影響歌とはどんな歌であろうか。
さは姫のそめし緑やふかゝらんときは森は猶もみぢせて

(後鳥羽院)

佐保姫の糸そめかくる青柳をふきなみだりそ春の山風

(詞花集・一三)

この二首は、「さは姫とそめしの語が同じであり、題材としても同じであるが、二首の間には有機的な関係がない。院は詞花集の歌を基本として全く別な歌を作ったのである。

うちたゝき心さはがす水鶏かな人まつやどのまきの板戸を

(季経)

終夜はかなく叩く水鶏かなさせるともなき柴のかりやを

(金葉集・一五二)

この二首は「水鶏かな」が共通であり、叩く水鶏を題材としていて相似ている。ところが、二首の間に、変化とか、余情的な連絡とかがなく、題材に共通性があるだけである。影響は確かに受けているが、本歌取とはいい難いのである。季経の作品は影響歌が三七首という多数であるが、本歌取でない単なる影響歌が一六首もあって、本歌取という面から見ると時代遅れという感がある。そして、本歌取に於ても切れ味の鋭いものが少ない。

神無月みむろの山の山おろしにくれなぬくゝる竜田河かな

(前斎院)

ちはやぶる神代もきかず立田川から紅にみづくゝるとは

(古今集・二九四)

この二首を見ると、前斎院の「くれなぬくゝる」は古今集歌の

「から紅にみづくゝる」を圧縮し竜田河のこととしているけれども、内容が似過ぎていて変化に乏しいし、取る言葉にしても、固有名詞の立田川だけでは本歌取とは認め難い。本歌取という強い意識なしに影響を受けた歌といふべきであらう。しかし、古歌を尊敬するところからそれを基調として作っていることは明らかであらう。こうした種類の歌が表に示したようにこの調査の中では五五首に及んでいて、古典影響の一端を担っているのである。

次に、本歌取の歌について述べる。当時の本歌取では、一句から三句あたりまでの句数を本歌から取る規則になっている。取る句数の多い歌を次に挙げる。

霜がれの籬のきくの雪ふればなおはつ花の心地こそすれ

(後鳥羽院)

霜がれの籬のうちの雪見れば菊よりのちの花もありけり

(千載集・四四九)

われこふる折もありなんあすか川昨日の淵もせにかはるなり

(小侍従)

世中はなにか常なるあすか川昨日の淵も今日は瀬になる

(古今集・九三二)

あふ事はけふ松が枝の手向草いくよしはるゝ袖とかはしる

(小侍従)

白浪の浜松が枝の手向草幾代までにかとしのへぬらむ

(万葉集・三四)

外山なるまさきのかづら色付ば吉野の奥の冬ぞしらるゝ

(釈阿)

み山には霞ふるらしと山なる正木のかづら色づきにけり

(古今集・一〇七七)

神風やみもすそ河による波のかず限なき君が御代かな

君が代はつきじとぞ思ふ神風や御裳濯河のすまむ限りは

(後拾遺集・四五〇)

これらの歌は、本歌の二句以上を取ったもので、殊に、最後の歌は三句を取っている。これだけになると、変化が大切であって、それがないと単なる模倣の歌になってしまう、独立が危ぶまれるのである。だから、作者としては、背水の陣をしいているわけであって、古歌に拠っていることを明らかにして変化の妙を凝らしているのである。この種の歌はなお多くを挙げる事ができる。

本歌二首を取っている歌がある。

ものごとに秋のあはれものこるなり霧のまがきにすめるよの月

(寂蓮)

物毎に秋のけしきはしるけれどまづ身にしむは萩の上風

(千載集・二三二)

さらぬだに夕さびしき山里の霧のまがきにを鹿なくなり

(千載集・三一〇)

身のうさを思ひくだけばしのめの霧まにむせふ鳴の羽がき

(前斎院)

身のうさをおもひしとけば冬の夜も滞らぬは涙なりけり

(金葉集・六二〇)

暁の鳴の羽根撫もゝはがき君がこぬ夜はわれぞかずかく

(古今集・七六一)

さきにけりをちかた人にこととひて名をしり初し夕がほの花

(小侍従)

心あてにそれかとぞ見る白露のひかり添へたる夕顔の花

(源氏物語・七八六)

打ち渡すをちかた人にももうすわれそのそこにしろくさける

(古今集・一〇〇七)

はなにの花ぞも

小侍従の歌は、「をちかた人に」こととひてで、古今集の歌を

連想させ、「夕がほの花」で源氏物語夕顔巻を連想させている、

二首の本歌を巧みに利用して、余情あらしめた巧みな歌である。

この作家は、本歌取が巧みである。それに比しては季経は下手で

ある。情を利用した歌として次の歌も挙げることができるであらう。

住吉のあさふはをのかきつばた衣にをすらん人もさぞせし

(小侍従)

住吉のあさ沢小野の忘水たえくならであふよしもがな

(詞花集・二三八)

本歌は恋の歌である。小侍従の歌はかきつばたに衣を染めると

いうのであるが、本歌の恋の歌が余情を与えて艶のあるものにして

ている。

ながめやる霞の末は白雲のたなびく山のあけぼのの空

(前斎院)

後れるてわが恋をれば白雲のたなびく山をけふや越ぬらん

(拾遺集・三三五)

前斎院の歌は白雲のたなびく山の状態だけをいっているが本歌は恋の歌で、それが背景になって艶な気分を添えている。これが余情を利用する本歌取である。

わきもこが玉もの裾による浪のよるとはなしにほさぬ袖哉

(前斎院)

あごの浦に船のりすらむをとめらが珠装の裾に潮みつらむか

(万葉集・四〇〇)

もみぢする秋の朝霧たつた山夜半に染けん色なかくしそ

(慈円)

風ふけばおきつ白浪たつた山夜はにや君が独りこゆらむ

(古今集・九九四)

以上の二首もそれぞれ本歌を余情的に利用している。万葉集の

実景の玉装の裾を序にして使うことによって、をとめを暗示し、

単に想像しているに過ぎない古今集のたつた山を実景にして、雑

歌ながら恋歌である古今集の歌を余情として利用している。

連作的な本歌取がある。次に挙げる歌はそれに属するものである。

らう。

桜花ちりのまがひに日は暮ぬ家路も遠し志賀の山越

(後鳥羽院)

この里にたびねしぬべし桜花ちりのまがひに家路忘れて

(古今集・七二)

うつしうへし小萩が本の秋の野に成はてねとは思はざりしを

(寂蓮)

宮城野の露吹結ぶ風のおとに小萩がもとを思ひこそやれ

(源氏物語・七六二)

降雪に三輪のやまもと埋もれてたのめし杉は木ずゑ計ぞ

(季経)

我庵は三輪の山もと恋しくばとぶらひきませ杉たてる門

(古今集・九八二)

まれにあふ秋の七日のくれは鳥あやなくいかに明ぬ此夜は

(小侍従)

天の川岩こす浪の立ち居つゝ秋の七日の今日をしぞまつ

(後撰集・二四〇)

まち出てもいかながめんわするなといひし計の有明の雲

(前斎院)

今こむといひし計に長月の有明のつきを待ち出つるかな

(古今集・六九一)

これらは単なる変化でなく、前後連作風に連絡のある歌にしているが、本来本歌取は変化を生命とするのであって、単に変化させたものだけの歌が大多数を占めている。

さらに又うすぎ衣にかげさえて夏をやこふるをのゝすみやき

(後鳥羽院)

深山木を朝な夕なにこりつめて寒さをこふるをのゝ炭焼

(拾遺集・一一四四)

はれまなき五月の雲も卯花のかきねにはるる玉川の里(寂蓮)

見渡せば浪のしがらみかけてけりうの花さける玉川の里

(後拾遺集・一七五)

いづくまでけふはいくのゝ道なれやえぞしらすげの草枕哉

(季経)

大江山いく野の道の遠ければまだふみもみずあまの橋立

(金葉集・五八六)

ふきゝつる花たちばなの身にしめば我も昔の袖のかやする

(小侍従)

さつきまつはな橘の香をかげば昔のひとの袖の香ぞする

(古今集・一三九)

かすみゐるたかまの山のしら雲は花かあらぬかかへる旅人

(前斎院)

秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬかなみのよするか

(古今集・二七二)

前斎院の歌は季節を変化させ、小侍従の歌は本歌の内容を知的に逆にして変化させている。変化のさせ方は種々の仕方があるが、この歌群にも勿論種々なものがあつて、挙げるに堪えない。ただ二、三のことを付け加えたい。

山おろしに汀のなみはたかくともなを霧ふかし宇治の河かぜ

(後鳥羽院)

遠近のみぎはの波はへだつともなは吹き通へ宇治の河風

(源氏物語・一三九三)

をみなへし色めくとしてや白露のむすびながらも心をくらん

(季経)

白露や心おくらむ女郎花いろめく野べにひとかよふとて

(金葉集・二四六)

この二首などは本歌取に違いのないけれども、あまりに変化がな

く似過ぎてゐる。だが、院初度百首という重要な百首歌に入れられてゐる歌だから、作者としても一応自信のあるものであつたらう。とするならば、本歌となつた原歌を非常に尊重してゐたということと、本歌を取ることが大きな技巧と考えられてゐたということを示すことになりはしないか。

今はとて山ほととぎす松がえに春もかゝれる池の藤なみ

(寂蓮)

わが宿の池の藤なみさきにけりやま郭公いつか来なかむ

(古今集・一三五)

夏きてぞ住かへりける山里は卯の花かきね子規なく (釈阿)

卯の花のさける垣根の月清みいねずきけとや鳴く郭公

(後撰集・一四八)

この二首は主題の変化でなく語の配置によって内容を多少改変する程度のものであるが、その技巧が面白い。釈阿の歌は「卯の花かきね子規なく」の句が、本歌の切れぎれの語を歌句の末に集約したという念の入つたものである。

我袖はかりにもひめや紅のあさはのらにかゝる夕つゆ

(前斎院)

紅の浅葉の野らにける草のつかの間も吾忘らすな

(万葉集・二七六三)

この歌の本歌の取り方も面白い。古典の影響を受けた本歌の内容は以上のようなのであるが、統計的な数量もさることながら、本歌取の内容という点からも、影響の受け方が公然であり、誇らしささえ持つてゐるように思われるのである。

紹介

和歌文学会編

『和歌文学大辞典』

和歌文学に関する最初の総合的大辞典である。二百六十九名の本文執筆者、その他多数の研究者実作者が五年の歳月をかけた専門辞典であり、古代以降現代に至る文学の主要な位置を占めつづけてきた和歌に関

する問題を取上げる際に、まず安心して準拠するに足る、最新の研究の成果を網羅した辞典である。(内容)、約四千五百項目を取録した本文では、古典和歌に偏することなく近代短歌にも広くスペースをとり、又一般項目を豊富に収載している総合性に特色があるが、本辞典の最大の特徴は、全体色の五割を占め、九百頁にも及ぶ、付録の存在である。歌碑現在目録・文献目録・複製本目録・図書館文庫の一覧表・万葉集作者

部類・勅撰作者部類・和歌史年表・索引・難訓索引、他に別冊として歌人系統図が収められている。いずれも労作であるが、就中、作者部類と年表とは、今後の和歌文学研究進展の基礎となる劃期的な業績であらう。なお、本学からも編集責任者となつた窪田教授を初め、多数の研究者実作者が本辞典の完成に寄与していることを付記しておきたい。(A5。二〇五五頁。明治書院。昭和三十七年十一月刊。八五〇〇円)